

保護者の授業観を育てる小刻み授業評価

Cultivating Parents' Outlook on Teaching through Their Repeated Classroom Observation

大西 貞憲 三原 徹

Sadanori Onishi Toru Mihara

有限会社フォー・ネクスト 東京女学館小学校

Fornext Inc. Tokyo Jogakukan Primary School

＜あらまし＞ 本研究では、簡便な小刻みアンケートを定型化し、授業参観時の評価に活用することを目的とする。授業参観者を対象として、携帯電話等を用いて数項目の評定を依頼し、集計結果を授業考察に活かすことで、専門的知識を持たない保護者であっても、授業観点を共有・醸成することが期待できる。

＜キーワード＞ 学校評価 教育評価 授業分析 学校経営 評価項目

1. はじめに

学校評価の義務付けに伴い、授業に対する学校関係者の評価実施が一般化しつつある。ただし、必ずしも教育の専門的知識を持たない保護者の場合、授業を見る視点が明確でなく、また、その個人差も大きい。評価結果の信頼性・妥当性は必ずしも高いとは言えない。また、授業における教師の行動意図が評価者側に対して的確に伝達されないため、教師にとって受け入れがたい評価となることもある。これら課題のため、授業改善等の取組みに際して評価結果は必ずしも有効に機能しないおそれがある。

そこで、本研究では授業評価にかかる具体的な項目を定型化し、小刻みに評価・フィードバックを行うサイクルにより、教師と保護者との視点の授業観のずれを把握しつつ、保護者の授業観を醸成する方法を提案する。

2. 授業評価の流れ

小刻み授業評価は図1に示すように、大きく6つのステップから構成される。年度当初に評価項

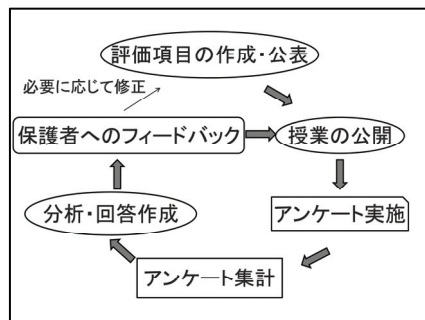


図1 授業評価の流れ

目を作成・公開後は、授業公開から保護者へのフィードバックに至るサイクルをできるだけ多くの回数実施する。

2.1. 評価項目の作成・公開

①評価項目の作成・公開ステップでは、学校の目指す授業の姿が項目に反映される。年度当初に、目指す授業像を校内で共有化し、それをもとに授業評価の目的と評価項目を具体的に保護者に対して示せば、保護者の授業を見る視点を明確にすることができる。教師もまた評価項目を意識することで、視点が共有された授業改善につながる。

例として、子どもたちの学び合いを重視した授業のための評価項目を表1に示す。

表1 評価項目例

I 教室環境	
1	教室内が整理・整頓されているか。 (机, ロッカー, 掲示物等)
II 学習指導の技術	
2	学習意欲を引き出す教材・教具の工夫はできているか。 (教師が自分で作った教材, 学習カードなど工夫しているかなど)
3	この時間に何を学ぶかがはっきりしているか。
4	適切な学習の進め方や時間配分はできているか。 (子どもが考える時間は適切か, 最後に授業を振り返る時間があるか, 時間に終わっているかなど)
5	指示や問いかけは具体的で, 子どもにとってわかりやすいか。
6	子どもの理解度を確認しながら進めているか。
7	子どもの間を回りながら, 個に応じた指導や援助はできているか。
8	子ども同士が関わりあう場面を作っているか。 (ペアやグループ活動などを取り入れる, 子どもの発言について他の子に意見を求めるなど)
9	教師は子どもの発言や行動をしっかり受け止めて, 肯定的に評価しているか。 (よい発言や行動をほめる, 間違いやずれた発言を否定)

	しないなど)
10	板書は、わかりやすく、子どもが考えを整理したり、たどれる工夫がされているか。 (文字の大きさ、配置、色分けなど)
11	この時間の学習は十分に子どもに理解されているか。
Ⅲ 子どもの授業態度	
12	子どもは授業の初めと終わりにきちんと挨拶しているか。
13	子どもは教師の話をよく聞き、授業に集中しているか。
14	子どもは友だちの発言を聞いて理解しようとしているか。
15	子どもは積極的に自分の考えを発言しているか。

2.2. 分析・回答作成

⑤分析・回答作成ステップでは、保護者からの評価結果を学校・教師がどう受け止めたか、今後どのように対応するのかについて、具体的に検討・公開する事がすることが求められる。すなわち、保護者と教師との間に認識のずれが著しい項目については、できるだけわかりやすく説明し、改善すべき点は、次の授業公開時よりも前に改善を確認できる具体策を示す必要がある。

2.3. 保護者へのフィードバック

⑥保護者へのフィードバック・ステップでは、アンケート実施後すぐに集計結果を速報として公表するとともに、集計・考察後、学校の分析・回答を具体的な改善策と合わせて公表することの2段階で区別して行う。3. で述べるように、評価の平準化には素早いフィードバックが求められるが、分析・回答の作成には十分な時間をかける必要があるため2段階となる。

3. 保護者の授業観が

共有・醸成される仕組み

小刻み授業評価の意義は、図2に示す3点、すなわち、a) 評価項目による観点の共有化、b) 他者の評価を知ることに伴う評価の平準化、c) 学校からのフィードバックによる授業観の深化により、保護者の授業観が共有・醸成されることにある。

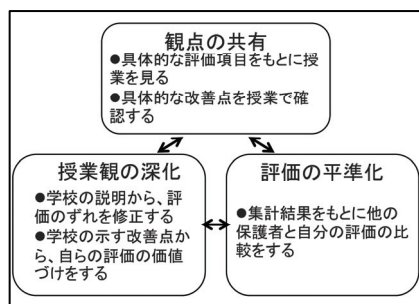


図2 小刻み授業評価の意義

a) 共有化については、実施回数が増し、保護者の授業観が育てば、保護者の評価項目作成への参加も現実的になると思われる。

b) 平準化については、保護者が参観した授業の様子や教師の意図や考察が記憶で明確なうちに集計結果を伝えることが重要である。このことで、他者の評価と自己の評価とを比較して振り返ることにつながり、結果評価のブレを解消する。

この際、アンケート集計処理にかかる時間と負荷が問題になるが、携帯電話等を利用したアンケートシステムを利用することで大幅な省力化が期待できる。

c) 授業観の深化については、保護者側の評価が学校側の具体的な対応に反映されることで大きな影響を与えうる。適切なフィードバックが繰り返されることで、保護者側も授業評価を前向きにとらえ、その結果、より真摯な態度で授業評価に臨むことが期待できる。

4. 足立区立五反野小学校での事例

2004年度から足立区立五反野小学校では年に2回、保護者や地域による授業評価を行ってきた。

授業評価サイクルを通じて、授業の特徴や課題を共有し、さらに、フィードバックによって得られた改善点を次の授業評価で確認することで、評価項目と授業の実際の場面との関係が明確になった。また、授業の改善を毎回確認することで保護者の授業への評価は高まる傾向がみられた。教師が保護者の評価を受けて授業改善に取り組みばその評価が高まり、保護者から信頼を得ている実感をもつことになり、教師の授業評価に対する姿勢を前向きなものにした。その結果、学校・教師と保護者・地域との授業観のずれが縮小され、授業評価に対する信頼性が向上した。

これらのことは、授業改善の効果が表れるための時間を確保した上で、評価サイクルを頻繁に複数回実施するほど有効に機能すると思われる。

5. 今後について

小刻みアンケートシステムを活用して、学校現場で小刻み授業評価を実践することで、その有効性と課題の検証を行いたい。

参考文献

足立区立五反野小学校(2005) 学校が変わるー保護者・地域のニーズを生かす学校改革ー